

行ってみ！チャレンジ 報告書

池野琴美

計画名：アイスランドでボランティア&取材活動

渡航先：アイスランド

計画申請日：6月13日

計画終了日：9月21日



■渡航概要と目的

私は2022年9月1日から21日までアイスランドへ渡航し、国際ボランティアとして環境保護活動とジャーナリズム活動を行いました。滞在期間の3週間のうち、2週間はボランティアメンバーと過ごし、1週間は自分で計画して旅行・取材をしました。

私がアイスランドへの渡航を決めた理由は上記したように2つあります。第一の目的は海外でジャーナリズム活動をするのでした。私の将来の夢は記者として世界を周り、その土地の特有な文化や生活をテーマに記事を書くことです。そこでアイスランド現地の Worldwide Friends という団体が主催するボランティアプログラムに目が止まりました。内容は、環境保護活動を通して環境について団体が運営する雑誌の記事を編集するというものです。海外で雑誌に関われるのは貴重な体験であると思い、半ばインターンのような気持ちで参加を決意しました。

第二の目的は、環境問題について真剣に向き合う機会を持つことでした。アイスランドと言えば、炎と氷の国と表されるように、火山活動が盛んな国です。そして、国のエネルギー消費量の100%を地熱を中心とした再生可能エネルギーで補っています。私はこの事実を知ってアイスランドという国に惹かれました。日本も地熱大国として有名ですが、地熱が全体に占める発電割合はわずか0.3%です。同じように地熱資源に恵まれた2国であるのになぜこのような差があるのかという疑問が沸きました。そこで、アイスランドと日本を比較することで日本のエネルギー問題を解決するための鍵が見つかるかもしれないと思い、現地での取材を計画しました。また以前に江ノ島で清掃活動を行ったことがきっかけで、海のゴミ問題にも関心を持っていました。しかし私の知識や活動は日本の海岸の一部を綺麗にしたことに留まり、人工的なゴミが海の生態系に与える傷や、国境を超えた汚染問題については考えることがありませんでした。そのため、当プログラムは日本以外の国がどのように海のゴミ問題に取り組んでいるのかを知るのに良い機会でした。

■渡航先を通して感じたこと、学んだこと

ボランティアに参加した2週間のうち、前半はビーチクリーンアップを行いました。アイスランド北西の Staður という場所にあるドミトリーで共同生活を行いながら半日は近所の海岸へ出て働きました。私たちが集めたのは、プラスチックを中心にした人工物です。一見綺麗に見えた海岸も、よく見ると漁業用のネットやマイクロプラスチックだらけでした。大変だったのは、ただ落ちているものを拾うだけではなく、地中や岩の間に埋まっているネットを引き抜かなければならなかったことです。想像以上の労働作業でしたが、1日で100キロ近くのプラスチックを回収することができたので達成感は大きかったです。そして、そもそもどうしてプラスチックを拾う必要があるのかということについて考えるワークショップにも参加しました。私が初めて知って衝撃だったことは、世界の海にはプラスチック・アイランドと呼ばれる廃棄されたプラスチックが集まってできた島が複数存在することです。それらが海洋生物に与

える悪影響は容易に想像ができました。また海洋汚染にとどまらず、環境問題のさまざまなトピックについて世界各国から来たメンバーと話し合うことができました。特にドイツではプラスチック消費削減のため量り売りが普及していることを知り、日本でも取り入れることができると思いました。そして印象に残っているのが、「日本の店員さんは何も言わずに商品をビニール袋に入れるって本当？」と聞かれたことです。近年ビニール袋が有料化したことを説明しつつ、やはり日本はプラスチック削減に遅れているイメージがあることに気付かされました。清掃活動を通して環境問題を身をもって実感し、ワークショップを通して深く考えることができました。

また9月日、前半の滞在中、私にとって一生忘れられないであろう経験をしました。それは、オーロラを見ることができたことです。その日は天気と場所に恵まれ、庭で絶景を味わうことができました。まさに光のカーテンが天から降り注いでいるようで、その神秘さには絶句しました。期待はしていましたが、本当に見られると思っていなかったので感激しました。ちなみに、カメラのレンズを通すと緑色に見えるオーロラですが、肉眼ではより白く見えることが分かりました。



そして後半は Siglufjörður という最北の町へ移動し、今度は人工森林で伐採の手伝いを行いました。アイスランドには、『森の中で迷ったら立てばいい』というジョークがあります。つまり、森林が少なく低木林ばかりであるということです。確かにどこを見渡しても草原が広がっており、森らしいものはほとんど見当たりませんでした。アイスランドから森林が減少した過程には長い歴史がありますが、ヴァイキングが移住して以降の森林伐採が大きな要因だそうです。そんな土地に再び森林を取り戻そうと尽力する現地の方々がたくさんいました。

私たちが滞在した Siglufjörður でも町の住人が協力して植樹を行い、人工の森林を育てていました。町の外れにあるその森林は、人工とは思えないほど高木が広く並ぶ大きなものでした。現在はたった2人の女性によって管理されており、主な作業は私のようなボランティア参加者たちが行っています。2人ともとても気さくな方で、アイスランドのことや森林のことについて色々と教えてくれました。彼女たち自身もボランティアとして数十年の間森林の維持に従事しているそうで感心しましたが、「森が人々の癒しの場である限り活動を続けたい。」と熱く語られていたのを聞いて強く共感しました。森林での活動は伐採後の枝をトラックに乗せて外に運び出すというもので、足場が悪かったこともあり、汚れを伴う大変な仕事でした。しかし同時に自然の中でマイナスイオンを感じながら働くことは気持ちが良い、爽やかな汗を流すことができました。そこで初めて労働の本質や楽しさを感じることができた気がします。



2週間のボランティアプログラムを終えた後は、自分で計画して旅行しました。最初に向かったのは、最南の Vik という町です。この町の魅力は、ブラックビーチと呼ばれる砂浜があることです。黒い砂浜に白い波が寄せる景色はとても綺麗でした。ブラックビーチは北の海岸に比べて驚くほど清潔で、ほとんどゴミを見つけませんでした。やはりゴミのない場所に何かを捨てるのは憚られるので、一度綺麗になった海岸は自然と綺麗に保たれているのだろうと

思いました。またもう一つの魅力として、Vik には火山について知ることができる施設があります。そのひとつが Icelandic lava show です。本物の溶岩を安全な施設内で近距離から見る事ができる、世界でも珍しいパフォーマンスを行っています。地学の専門家の方がアイスランドの火山について説明してくださり、よりアイスランドの土地的特徴を掴むことができました。溶岩がパチパチと音を立てて流れる様子を見たことも、貴重な体験になったと思います。



Vik を出た後は首都の Reykjavik に滞在していました。Reykjavik は首都とは言っても小さい街で、観光地の大きな通りから 3 本ほど先の通りに行けば海岸に出ることができます。街の人たちはアイスランド人より観光客の方が多い印象で、ほとんど全員が流暢な英語で話してくれました。アイスランドには電車がないため市内はバス移動でしたが、交通網は充実していました。また日本と比べて IT 化がとても進んでいることを実感しました。例えば、支払いはカードや電子マネーが主流であったり、バスのチケットも全てスマホで取るシステムでした。そしてシェアサービスの電動キックボードに乗って颯爽と移動する人たちといった、日本には光景も見られて面白かったです。しかし物価がとても高かったため、食品などは地元のスーパーで購入しました。異文化の中で生活することは、本当に色々な発見を与えてくれるとともに、今まで当たり前だった日本での生活を客観視させてくれることを改めて感じました。

帰国 2 日前、ずっと訪れたかった地熱発電所に行くことができました。Reykjavik から車で 20 分ほどの場所にあるヘトリスヘイジ発電所では、地熱に関する展示をしています。ア

アイスランドで地熱発電が普及した過程や、発電の仕組みについて詳しく学ぶことができました。まず、アイスランドが再生可能エネルギーに力を入れ始めたのは最近で、オイルショックをきっかけに集中的なエネルギーの転換を実行し、現在のように全ての電力を賄えるほど普及させたことが分かりました。日本と比べて人口が少なく広大な土地があるため、発電所の設立がスムーズに進んだのではないかと考えます。やはり今の日本で地熱発電を拡大できない理由の一つは土地問題ではないかと思えます。しかし興味深かったのは、発電に用いる主な機械の部品が日本製であるということです。意外なところで日本との繋がりを感じて嬉しかったとともに、技術は十分にあるのに国内で有効活用できていないことに勿体無さを感じました。関心を持っていたアイスランドの地熱発電について色々と知ることができたため、訪れて本当に良かったと思います。



■今回の経験を今後どのように活かしていくか

今回の大きなテーマであった環境保護について学んだことは、『百聞は一見にしかず』です。100回「プラスチックは環境を破壊する」と聞くよりも、海岸に足を運んで自分の手でプラスチックを集める方が確かに環境問題に真剣になることができました。そのため、より多くの人が私のしたような体験をできる機会をつくりたいです。まずは身近な人を海岸清掃に誘うことから始めてみようと思います。加えて、環境について考えるワークショップのような場も企画側になって増やしていきたいと思います。また、私が環境のために出来ることを考えた時、記事に書いて人に伝えることも一つの貢献になることに気づきました。やはり私はジャーナリストとして大切な情報を伝える立場になりたいです。そのためには常に新しい発見をする意識や情報を見極める洞察力を持ち続けたいです。

■ 今後本プログラムを希望する方へのアドバイス

本プログラムを希望される方々は、強いチャレンジ精神と信念を持った方々だと思っております。そのままの熱量で挑戦してほしいです！海外渡航は良くも悪くも日常を飛び出した経験をすることになるので戸惑うこともあります。たいていのことはなんとかなりますし、間違いなく貴重な人生経験になります。「行ってみ！チャレンジ」は皆さんの挑戦を実現に導いてくれると信じています。

最後に、私の渡航計画を無事終えることができたのは本プログラムのお力添えのおかげです。今後の人生を支えてくれる貴重な体験をすることができました。本当にありがとうございました。

■ 主な支援金の使途

- 交通費
- 宿泊費
- ボランティア参加費